

学問はいらぬものだと言された。しかし往生の為に学問はいらぬものとわかつたのは学問のお蔭だと言っている。

こゝに至ると、名号の功德の分析理解は一応意義がなくなるものではないか。さもあれ法然上人の法語に、本願の意趣を知る程の学問は必要だと申されているからその本願の意趣の根本的理解がこの十二光によつて余すなく理解されるとすれば弁栄上人の功績又大なると云えないだろうか。かゝる観点から十二光と言うものに接して来た私は、一面法然上人の偉大さを単調な「ただ往生の為に南無阿弥陀仏と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて念仏する」ことだと言う文章の特に力強さを知ると共に、本願の意趣の現在の把握を、まがりなりに弁栄上人の十二光体系によつて知ることが出来たのはまことに幸せなことに云わなければならぬまい。

法然上人の教学の研究

——特に浄土観について——

片 山 法 道

浄土宗は法然上人の創立するところである。今から八

三〇年前岡山県の山峡に生まれた法然は、家庭的不幸のため、比叡山に登り仏教を学び、広く各地に道を求められたのである。当時の叡山の教学は法然にとつてはあまりにも了解しにくかつた。法然は善導の釈義によつて、より簡明で最も重要である凡夫得脱の新仏教をこゝに提唱したのである。

十八才の時黒谷叡空上人の許に投じ目的に向つて奮励されること二十有五年、遂に簡明なる万機得脱の要路を確認せられ、浄土一宗の確立を見たのである。

その浄土観に於いても生仏不二の立場を排除して、生仏分離の立場を取られたのである。当時は聖道門の教は唯心の浄土、己身の弥陀であつて、浄土といつてもそれは唯心の所現此土に於いて浄土を現じ、娑婆即淨光土となるという考えが基本的に存在していた。したがつて、この現実世界を離れてどこか別の所に浄土を立てるといふ考えは聖道門の教として取らなかつた。これに對し上人は「娑婆のほかに極樂あり、我身の他に阿弥陀仏います」と説いていられる。

上人は従来の聖道門的立場ならば凡夫が往生することが出来ない。即ち観念的な浄土ではなく、指方立相の浄土でなければならぬと考えた。

さて上人の浄土観が客観的西方の浄土の存在を認め、之に純粹の思慕をよせられたのである。指方立相の肯定の文は左の如くである。「和語灯録」六 或人に示す詞第二に、

「シトハコノ時西ニ向フベカラズ。又西ヨウシロニスベカラズ、北南ニ向フベシ。大方ウチウチイタランニモ打臥サンニモ必ズ西ニ向フベシ。若シユフシク便宜アシキ事アリテ、西ヨウシロニスル事アラバ心ノ内ニ我ウシロハ西ナリ、阿弥陀仏ノオハシマス方ナリ、唯今アシサマニテ向ハネドモ心ヲダニモ西方ヘヤリツレバ、ソゾロニ西ニ向ヒテ極樂ヲ思ハヌ人ニクラブレバソレニハマサル也。」

と述べている。この文によれば娑婆と極樂、我身と阿弥陀仏の区別がつくであらう。又西方指南鈔（親鸞聖人全集一、三六）に浄土と娑婆との関係についてのべている。

この様に謙虚にして、純心な気持で西方浄土を認容されたのも、凡夫なるが故仏の本願力によつて、極樂に生ずることが出来ると、絶対的に確信を得られたのである。

又薩摩本「法然上人伝記」の法語では「但念仏は極樂に生れるが、但余行は憊慢国に生れる。然るに念仏余善兼行の者で念仏の方に心重きは余行を難うとも極樂に生じ、余行の方に心重きは念仏を助くとも憊慢に生れる。」

と述べ極樂と憊慢との關係に於いて、弥陀の本願たる念仏を持つものは極樂に生ずとの見解が取られている。又「和語灯録」の東大寺十問答では念仏往生の人は報仏の来迎にあずかるが、難行の人の往生は化仏の来迎である。念仏も余行や疑心をいささかも難うるは化仏の来迎を見て、仏をかくし奉るものである。と但念仏と諸行者の来迎の区別を説いている。但念仏は報仏来迎報土の往生であり、助念仏但諸行は化仏来迎化土の往生なることの意を明らかにされている。

以上の様に法然上人は浄土を理解されているが、当時の浄土教に反し、簡明さを持つて西方を認めておられる

のである。この迷妄の娑婆世界より脱却して西方を敬慕せられた事は、人間の能力、機根を考えて当然といわねばならぬであらう。

法然は当時のあらゆる思想界の影響を受けていると考えられるが、聖道門的な諸行往生思想を無価値とし、聖道門によつて遮断されていた阿弥陀仏の慈悲をいかなる悪人にも光被せしめることになつたのである。法然は經典にとかれる文章を絶対的なものとして讃歎されたのである。浄土についても阿弥陀仏の浄土を報土と判じ、その報土とは阿弥陀仏という報身仏のいる極楽浄土である。浄土三部經の一つ「阿弥陀經」には「西方十万億の浄土を過ぎて世界あり名付けて極楽という」とあつてこれは指方立相の浄土として法然の認容されている浄土である。その指方立相の浄土へ往生することの出来る者はどんな悪人でも口に「南無阿弥陀仏」を唱えれば往生出来ると万人得脱の専修念仏をときだしたのである。このことは民衆一般により深く浄土教を浸透させたことになる。法然がことさら浄土宗を公称された理由は、凡夫が直ちに

完全な解脱を得しめられる事を明示せんがためであつた。しかし一般仏教の常規としては、往生を求めるものの機根によつて、そのものの価値の相異を生ずるというものである。

——凡夫——化身化土

——聖者——報身報土

ということになる。報身報土の世界は、完全な解脱の世界であるから、煩惱執着のとりきれたもののみ味いうる世界である。凡夫の味う世界価値はどうしても不完全な世界価値でなければならぬのが当然である。自然弥陀仏の浄土を化土とみるか、それとも報土と見るかによつて凡夫の救われる世界かどうかきまるわけである。天台学では凡聖同居土の化土であると見ているから凡夫の味うる世界である。法然は一毫の善なき悪人でも、唯本願の念仏を称えるならば、直ちに完全な報身阿弥陀仏の慈光に照らされ、報土の世界を味わうことが出来ると解かれている。

上人は「娑婆のほかに極楽あり、わが身のほかに阿弥

陀仏います」ととかれたことは、凡夫を化益するために
は観念的な浄土ではなく、指方立相の浄土でなければならぬと考えたからであらう。

善導教学の研究

― 特に凡夫性の強調について

岸 泰 純

善導教学が成立するには、師當時の時代的乃至思想的な背景が重要な問題である。

南北朝は隋によつて統一されたがその隋代には、天台、三論、三階教等が勃興し、後の唐代は支那仏教史上黄金時代とも言われるべきもので、太宗の帰仏外護もあり、浄土教、法相、華嚴、律、禪、密教等の各宗派が独立大成されるに至つたのである。道綽、善導の出世せられた時代即ち隋末唐初には、相次ぐ戦乱や、北周武帝の廢仏事件等により、法滅の相をまざまざと示し、人々に末法到来の自覺を促した。このような中にあつて道綽は安樂集

に、

我末法時中億億衆生起行修道未有一人得者当今末法現
是五濁惡世、唯有淨土一門可通入路

といひ又

諸仏大慈動歸淨土縱使一形造惡但能鑒意專精常能念仏
一切諸障自然消除定得往生何不思量都無去心也

とある如く、末法の世に於ける時機に相應した教が道綽
教学の基調であり、西方願生の思想は、益々民衆の間に
広まつたのであるが、この道綽の思想は善導によつて受
け継がれたのである。善導は正しく觀經疏によつて宗を
立てられたのである。隋代已来、觀經は流行經典の一つ
として数えられていたようであつて、善導以前に於ても
淨影寺惠遠、天台智顗、吉祥寺吉藏等によつて各々その
疏が著わされたのであるが、善導はこれらのいずれにも
満足されなかつた。このことは善導の觀經疏の末に「今
欲出此觀經要義楷定古今」とある文によつて明らかであ
る。では何故諸師の説に満足せず、新たに觀經の要義を
出して古今を楷定せんと決意されたのであるか。そのこ